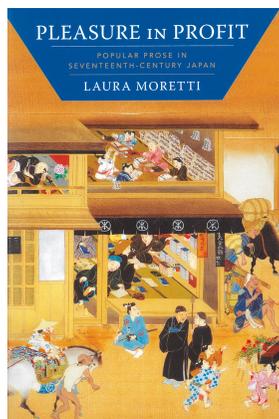


ラウラ・モレッティ

## 『利得の喜び——十七世紀における大衆向け散文作品再考』

Laura Moretti, *Pleasure in Profit: Popular Prose in Seventeenth-Century Japan*

ゲルガナ・イワノワ



Columbia University Press, 2020

現代の価値観や発想はどのようにして過去を理解することを阻むだろうか。なかでも現代の文学作品による捉え方は、どのようにして十七世紀日本における文学作品に対する理解の妨げになるだろうか。ラウラ・モレッティの画期的な研究は、これらの質問に答えを導き、初めて商業的出版業界が日本において成り立った江戸時代初期にさかのぼる興味深い旅へと読者を誘う。出版業界に関する緻密な調査を通じて、モレッティは江戸初期に商業的に制作された大衆向けの文学について洞察に満ちた意義の深い視点を提供する。『利得の喜び——十七世紀における大衆向け散文作品再考』と題するこの学術書は、いかに近年構築されたラベルや骨組みを切り捨てることにより生産的な過去の再考察が果たせるかということ説得力を持って提示している。

いつたい十七世紀の日本において、当時の読者たちはどのような作品を、どのようにして楽しんでいたのであるかという質問はモレッティの著書を先導する道しるべである。現代のレンズを通して過去を見るというアプローチよりも、モレッティは今まであまり研究者の関心を集めなかった多様な文学作品について論じる。その序説において、先学によつて構築された十七世紀の文学史を書き換えることが問題解決の糸口であると述べている。先学の傾向は、井原西鶴の作品を文学生産の中心におき、江戸時代初期の文壇において広く流行していたのは散文作品であったとする。そして、井原作品の優秀さを称え、他の作品群を劣つたものとして無視してきた。多種多様な一次資料を踏まえて、モレッティは中世の後に続く時代を支えた文壇について、さらに豊かで刺激的

な視点を提供している。

十七世紀の社会的かつ文化的な文脈を明らかにするために、モレットイはリテラシーという概念を考察することから論述を始める。第一章「書き言葉の文化」では、読者に焦点を当て、いかに広い読者層が階級の差を超えて社会的、または個人的に重要な世渡り術としてリテラシーを身に付けていたかということをも明解にする。モレットイは、当時のリテラシーがどのようにして概念化されたかを論じており、特に、「手習い」と、手習いを修得した後に進む「学問」におけるリテラシーに注目している。この概念化は、学識のある読者と初心者読者という二種類の読者層が存在したことを提案する。十七世紀の社会において、読み書きができる人々とできない人々に分けるよりも、むしろモレットイはスペクトルの両端を占有している「手習い」と「学問」をする人々の間に複数の読者層が存在したことを主張している。

このリテラシーのスペクトルの中に存在する多様な読者層と、様々な経済手段の需要を満たすために商業的な出版業界は成長し、迅速に進化した。第二章「出版事業」において、本の生産の鍵となる役目を負っていた商業的な版元たちが売上を増やして財政的利益を最大にするためにいかに多様な戦略を練っていたかについて示している。これらの戦略の一部は本を包装し直してテキストを修正したり、書籍目録において、種類別に本を配置したりする

ことにあつた。版元の広範囲な本の生産と市場に参加する傾向は、かれらが文学的な生産の主役を演じていたことを示している。

ジャンルごとに出版するというアイデアに基づいて、モレットイは次の三章において、特に儒教や仏教の教えや行儀に関する本、手紙の書き方の本といった、読者が自らの生活に変化をもたらすことを奨励したテキストの事例研究を行っている。これらの書物はそれぞれ異なる種類の知識を提供したにもかかわらず、全ての作品例は読者がより社会に適合しやすくなるような機会を与えた。第三章「道を交渉する」において、モレットイは仏教と儒教の商品化について、双方がどのように構築され、読者が道徳的、宗教的、そして市民として知識を向上させることを助けたかを考察する。仮名和書と仮名法語という二種類の出版ジャンルに焦点を当てることにより、儒教の布教に使用された教訓的な書物は仏教と儒教の徳行を教えるが、頻繁にこの二つの境界ははつきりせず、調和的な社会道徳を促すことに役立つたとモレットイは主張している。仮名和書や仮名法語とされてきた作品が十七世紀の読者にとって慣れ親しんだ文体の作品に仕上げてあることに思慮深く注目している。なぜなら、これらの作品の中心となる語り手は、道徳観念が読者に伝わることを目的としており、これは中世から口伝で語り継がれてきた伝統だからである。

学識に加えて、円満な人格になること、そして行儀作法に関する

る知識を得ることは社会において成功を遂げるために重要であった。第四章「礼儀作法」は礼儀正しさなどのようにその知識が読者に伝えられたかについて考察している。「しつけ方書並びに料理書」を検討しつつ、モレッティはどのようにに礼儀書が読者に社会階級を超えて役立つ表現法を教育するかを分析した。これらのテキストは、それまで限られた特権階級のみに独占されていた知識を広い読者層に提供したいという要望が現れており、どのようにして版元が商業戦略として秘伝を開示するというアイデアを利用したかということを表している。

第五章「熟練した手紙の中で言えよ」で、モレッティは手紙の書き方・読み方・解釈という版元が形作つた別の礼儀に関する概念について探索している。複数の出版物ジャンルを通じて読者を指導するにあたり、人のつながりや社会的な知識を活性化させ、当時の商業的出版業界はさらに出版物生産を向上させた。これらのジャンルは冠婚葬祭など特定の儀式に適應する既に出来上がった文章を集めた手紙のマニュアルという「往来物並びに手本」、交換された手紙を中心とした架空の物語、または既存の文学資料から抜粋した恋文である。これらの資料は実務的な知識と娯楽を提供し、またナラティブとノンナラティブの境界線がいかに曖昧であるかという証明にもなっている。

第六章「現在への委託」は金銭と災害に関する作品に注目し、

いかに版元が時局的な知識を儲けの多い作成物として一括販売していたかを検討している。これらの作品は比較的教訓性が低いものだが、当時の読者の社会の理解を促した。江戸初期の資料は、どのようにして経済的な立場を向上させ、金銭を得ることができるといふような実務的な助言に富んでいるわけではないが、金銭に関する基本的な知識を提供した。一方、災害に関する書物は、災害を報道し、その影響で繰り広げられる人のドラマも記述し、ストーリーテリングによりトラウマを抱えた人達に対する治療法としても使われていた。

第七章「多数性の勝利」では、さまざまなジャンルの出版物を検討して豊富な証拠を集め、モレッティはどのようにして大衆向け散文をそれらに慣れていない二十一世紀の読者に読み物として奨励するかについて考察する。我々の期待に挑戦するかのよう、これらの作品はほんの少しの研究者の関心を得ただけであった。現代文学史から遮断したにもかかわらず、重要なテキストはこれらが十七世紀の版元と読者にとつてどのような役割を果たしているかを示してくれる。随筆はそのような例の一つである。モレッティは読むという行為が娯楽的なのは、テキストの物語性にあるのではなく、読者が常に学ぶ楽しみを育み認知レベルを継続しているからであるという考えを維持している。十七世紀における文学作品とその需要は書籍の市場に関する知識無しでは理解できない

い。版元や著者が市場戦略として使ったのは多様性というコンセプトだ。ナラティブとノンナラティブ、フィクションとノン・フィクション、一元と断片的なものといったことを二項対立のカテゴリに分けるのは難しいものである。なぜなら、これらの二項対立は甚だ無効力であり、書籍市場への関心を遠ざけてしまう。エピソードで、モレッティは近世の版元たちが多様な知識を広い読者層に伝えるという戦略を振り返りまとめた。

モレッティは重要であるのにもかかわらず研究者の関心を得ない大衆向け散文作品の再考察を成就させ、興味深い驚くほどの説得力を継続させている。近世文学史の先行研究や文学理論に加味して、近世文学の世界についての我々の知識を製錬し、一次資料をいかにより良い方法で学べるかという有益な方法論を提供する。さらに、自身の理論の裏付けのため、研究者から注目されない作品を数多く翻訳し、要約することによって、モレッティは、十七世紀の読者層がどのようなものであつたかを想像させ、また近世文学作品の英訳が少ないなか、その資料を増加させた。「ナラティブ資本」、つまりナラティブを理解するのに不可欠だったノンナラティブから得られた実務的な知識というモレッティの概念は、江戸時代初期の一次資料に接近する時に非常に役に立つ。さらに、限られた特権的な読者層のみがアクセスできた知識がどのように再構築され、初心者読者にも読まれるようになったかと

いうことを明らかにしたモレッティの研究は、応用的に古典文学が近世初期に変容され、どのようにリテラシーのスペクトルに作用したかという事象に当てはめられる。モレッティの魅力的な様式によって提示されるこの有益な研究は、十七世紀の出版事業とそれが生み出した大衆文学に関して知識を拡大したい読者には重要であろう。

(日本語訳に際しまして、亀田和子先生に多大なるご協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。)